Part Ⅱ

世界の子どもたち

本シリーズは、フォトグラファー中西あゆみさんが
「世界の子どもの生活とあそびの今」をタイムリーにレポートします。

写真・文　中西あゆみ

インドネシア

日曜日

ジャカルタは圧倒的な車社会なので、歩行者が優先的に安全に道路を横断できる環境が整備されていません。人々の安全意識も低く、歩行者のために自ら一時停止する車は皆無といってもよいほど。道を渡る人はまさに命がけです。車の方はスピードを落とすどころか思いっきりクラクションを鳴らします。渋滞時には、いかに一秒でも早く進めるかが勝負。1分1メートル程度しか動かないラッシュ時には人々のイライラがピークに達します。停止中のバイクや車がお互いにクラクションで牽制し合いカオスな空気感をさらに重くしています。排気ガスが一日中全身を覆います。歩行者や周辺住民にとってフレンドリーな町ではありません。

そんな状況を改善するため、3年前から「カー・フリー・デイ（車がない日）」というイベントが催されるようになりました。毎週日曜日の朝6時から11時、中央ジャカルタのメイン道路数キロが歩行者天国として開放されるのです。早朝からウォーキングやジョギングをする人々で道はあふれ返ります。家族連れ、学生、ランナー、サイクリングチーム、NGO団体、自社の宣伝をする人々、食事や飲み物の売り子たち、ストリートキッズ…老若男女入り交じり、10万人に

1

ものぼると言われるものすごい数の人々が歩きます。週に一日数時間だけ、気兼ねなく、マスクを外して堂々と外を歩くことができる、一時の健やかさを感じることができる、そんな貴重な時間です。

日曜日は家族団らんの日でもあります。南ジャカルタ、グバグサン地区の「ミリン公園」は一年前にオープンしたばかり。無料の公共の公園です。木々が整然と植えられ、大きな池や子ども用の遊具。美しく整備された公共の公園はインドネシアでは非常に珍しく、週末になると多くの家族連れが訪れます。もともと土地抗争があり、市によって公園がつくられることで決着した場所でもあるそうです。隣には大きなモスク（礼拝場）、反対側の柵の向こうにはゴミ山があり、鳥がつつき合っています。入り口付近は訪れる人々でごった返していますが、一歩公園内に足を踏み入れると穏やかな雰囲気に包まれます。

この日は動物愛護を訴えるボランティア団体により、触れ合いイベントが催されていました。インドネシアでは、カメやヘビなどを捕え、殺して食べてしまう人が未だ少なくないと言います。啓蒙活動の一環として、犬、ジャコウネコ、イグアナなど、ペットとして飼われている哺乳類と爬虫類の動物たちが公園内に放されています。恐る恐るカメを抱き上げる子どもたち、ボランティアが体に巻く大きなヘビを見て歓声を上げる親子がいます。

隣町のラグナンにはマーケットが軒を連ね、とくに週末に賑わいます。1台の原付バイクに4人家族。そんな姿を何台も目にします。幼い子どもにもヘルメットはなしですが、誰も気にしません。

日曜日はここジャカルタでも、家族が時間を共有する一日であり、子どもたちにとって、平日働く親と一緒に過ごすことができる特別な時間です。一見普通のことに聞こえますが、そういう時を過ごせるのは中流層以上の家庭に限られます。経済成長の恩恵を受けることができる立場の人々だけが「普通」の休日を過ごせます。町や公園を賑わす人々の様子や服装から、そんな日曜日の現実を垣間見ました。

©Sameer Al-Abdullah

中西あゆみ
フォトグラファー
東京出身。米国でフォトジャーナリズムを学ぶ。2010年よりインドネシアのジャカルタを拠点に活動。長編ドキュメンタリー映画を制作中。

1.「カー・フリー・デイ」。中央ジャカルタの歩行者天国を歩く人々。 **2.** 日曜日の午後を公園で過ごす家族。グバグサン地区。 **3.**「ミリン公園」での動物愛護イベントでボランティアの体に巻かれたヘビを見つめる親子。 **4.** 美しく整備された公園の柵の反対側にはゴミ山が広がっていた。 **5.** 路線バスと並び、歩行者天国で開放された道路をサイクリングする人々。 **6.** 全身を真っ黒に塗り、海底炭鉱発掘反対のデモ行進をする活動家集団。「カー・フリー・デイ」にて。 **7.** ラグナン地区にはマーケットが軒を連ね、休日には多くの家族が原付バイクで買い物に立ち寄る。